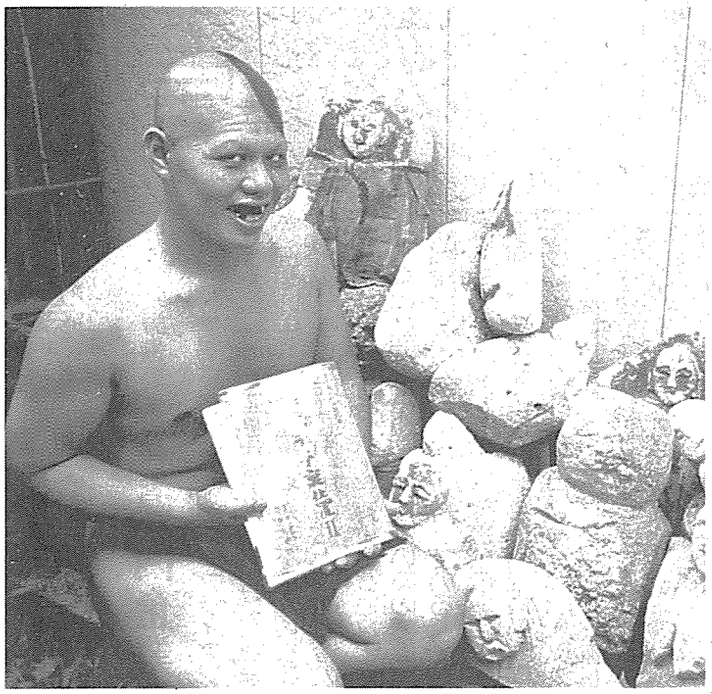
強烈キャラ 名監督の目に

大部屋出身の俳優 土平ドンペイさん(52)=草津市⑱

はい上がる人 わたしの歩跡

《30歳の頃、偶然知った「ミナミの帝王」のオーディションに応募した。レンタルビデオ専門のオリジナル映画「Vシネマ」の人気シリーズで、劇場映画化もされた》



大部屋時代の異形あれこれ。三池監督にも強烈な印象を与えた ＝いずれも本人提供

「ミナミの帝王」でチョイ役

確か日曜でした。1時間前の午後2時ぐらいに大阪市の心斎橋に行ったらものすごい人で、後で聞いたら350人来てたんですって。ようやく呼ばれてビルの2階に入ったら、審査する人が6、7人いましたわ。「端から名前と出身を言うて。関西弁しゃべれるなら、ちょっとしたお芝居やってもらうかもしれんし」。眉をそって頭がつるつるの僕はピカイチのキャラでした。でも、1万円も払ったのに全然連絡がなくて、大阪の制作会社に電話してみたんです。そしたら、たらい回しにされて何回電話しても同じなんです。

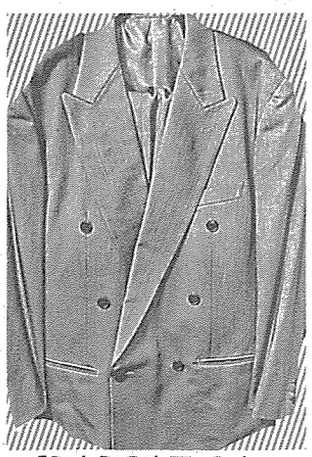
《普通なら諦めるところだ》

会社の所在地を探して、行ってみたんですわ。オーディションのプロデューサーに事情を説明すると、「おお、そうか。あそこにおる助監督に聞いてみ」って言われ、「京都の大部屋のもんですけど」。助監督は「はあ？京都でオーディションするから連絡先だけ書いといて」って。

しばらくしてようやく連絡があって、「『ミナミの帝王』でエキストラが1人ほしいんやわ。出てくれる？」。「絶対行きます」。西武大津店の1階でやんちゃなピンクのスーツを買って。ミナミの帝王やったら、これやろう、間違いないって。賭場の下足番の役ですわ。ゲストの役者が賭けに負けて階段を下りてきたところに座って、「何やもう終わりか」って一言言うんです。ピンクのスーツを見せたら、衣装さんは「ちょっと待って」って口を濁し、監督が来てくれはって「どんなスーツ？　あのさあ。下足番やから、ほんとはジャージーと、よれよれの白シャツでええねん」。「このために買ったんで、なんとか」って粘ったら、監督が「下だけはええわ。上はそのスーツいらんから」って。

完成した作品をビデオ屋さんで借りたら、セリフもカットされずにあって、最後に本名の「土平友厚」って出て、すごいうれしかったですね。

《この経験が、思わぬ大きな出会いにつながる》



「ミナミの帝王」のオーディションのため購入したピンクのスーツ

京都でのオーディションもちゃんと連絡をくれはったんです。幸いにも大部屋の仕事とかぶらずに東映京都撮影所でのオーディションに行けたんですね。柄悪そうな東映の役者が何人か待っていましたわ。3人ずつのオーディションで、向こうは監督と助監督とプロデューサーだけ。監督が「土平さんですか。『ミナミの帝王』のオーディションに来られていましたよね。なんてすごいキャラやと思ったんですよ」。「ありがとうございます」。「この作品でも、何かあればお願いしようと思いますんで」。そのときは全然知らなかったんですけど、それが三池崇史監督だったんですね。

《三池監督はVシネマを多数手がけ、後に劇場版の映画を演出。アクションからバイオレンス、ホラーまで幅広く監督し、カンヌなど海外各地の映画祭で上映されている。ピット作に「クローズZERO」シリーズや「ヤッターマン」など》

【編集局・大澤重人】

＝つづく、水曜掲載

同級生「いじめ許さぬ正義感」

大阪府箕面市の小中学校でドンペイさんと同級生だった済生会滋賀県病院（栗東市）の稲本望・健康管理センター長からエールが届きました。「小学校時代は体が大きく、番長みたいな雰囲気でしたが、実際は優しい男で、いじめなどを許さない正義感タイプでした」と振り返り、「大部屋からこの年まで俳優を続けていることに感銘しました」と活躍を喜んでいます。